

日本語の不思議 3J 池畑

1 焼き餅を焼く

突然ですが、「焼き餅を焼く」この言葉にどこか違和感を感じませんか？

焼き餅を焼く。

嫉妬の気持ちを感じていることを示すために使う言葉です。妬き気持ちを抱く(妬く)から(語呂を合わせて)焼き餅を焼くということですね。

しかし、私はこの言葉を聞いて、どうにも納得できないことがあるのです。

それは、焼いた餅をどうしてもう一度焼く必要があるのか、ということです。

響きが良いのは認めます。焼き餅と妬き気持ちの巧い掛詞。美しい日本語だと思います。餅を焼くじゃ、意味が分からなくなりますし。

でも、普通に考えればおかしくはないでしょうか？

現実的に考えて、焼いた餅を更に焼けば焦げてしまいます。硬くてとても食べられたものではありません。そしたら、捨てるしかないです。

昔の人は「勿体無い」の精神で食べ物を粗末にしないよう慎ましやかに暮らしていたはずで、更には、餅は一部の富裕層以外は滅多に食べられない、かなりの高級品だったはずで、それこそ、年に一度しか食べられないほどの。それなのに、そのような人達が作った言葉が、どうして、焼き餅を焼くなのでしょうか。この言葉を作った人は違和感を覚えなかったのか、そこを疑問に思うわけです。

日本語には、他にも「穴を掘る」や、「歌を歌う」など、動作と結果が同じものがあります。つまり、「掘る」や「歌う」だけでも意味は通じるのに、あえて目的語である「穴を」や「歌を」を付けるのです。

焼き餅を焼くも同じことなのでしょう。もともと言葉として存在していた「焼き餅」が派生して「焼く」がくっついたのではないかと思います。とどのつまりは、言葉としての音の美しさを優先するのか、意味を優先するのか。問題はそこにあったのではないのでしょうか。実際に私たちが口にしてみて、音としての違和感がないか。「焼き餅を焼く」の場合には、まず音のうつくしさありきだったのでしょう。そもそも、掛詞に厳密な意味を求めるのがおかしいのかもしれませんが、それでももっとうまい言葉の作り方があったのではないかと感じてしまいます。

2 代替品をなんと読むか

私は「だいがえひん」と読んでいましたが、知人に「だいたいひん」と読むのだと指摘されました。以前どこかの小説のルビで代替品を「だいがえひん」とふってあるものを見かけたことがあったので、不思議に思い yahoo の辞書で調べてみたところ、

だい-がえ[-がへ】【代替え】

「だいたい(代替)」の重箱読み。「一輸送」「一地」

と出ました。

ん、重箱読み——って何だろう。

そもそも恥ずかしながら重箱読みが何であるかがまず判らない(何となく意味合は想像できるけれども)ので、「重箱読み」の意味を知るために再び辞書検索しました。

2字またはそれ以上の漢字で表記されている語を、「重箱」(「じゅう」は音読み、「ばこ」は訓読み)のように、上を音、下を訓で読む読み方。「縁組(えんぐみ)」「献立(こんだて)」など。

なるほど。つまり、
「だい」←音、「たい」←音だとすれば、
「だい」←音、「がえ」←訓である読み方の事を重箱読みと言うそうです。単純に二つ以上の読み方がある熟語を重箱読みというのかと思っていましたが全然違いましたね。

献立(こんだて)、仕事(しごと)、銀色(ぎんいろ)等も重箱読みというわけです。
そして、「重箱読み」の逆を「湯桶読み」というらしく、こちらは、

「ゆ」は「湯」の訓読み、「とう」は「桶」の音読みであるところから、漢字2字でできている熟語で、上の字を訓で、下の字を音で読むこと。「夕刊(ゆうかん)」「手本(てほん)」などの類。

「ゆう」←訓、「かん」←音の形であるのが湯桶読みというわけです。

その言葉が音読みと訓読みのどのような組み合わせで構成されているかなんて日常では意識することはないですよ。少なくとも、私はそんなこと一度たりとも意識したことはありません。

元々、訓+訓、音+音で発音する単語があつたらしいのですが、ある漢字において、音あるいは訓の一方のみが読まれることが圧倒的に多い場合、日本人はその発音に慣れてしまっているため、知らず知らずのうちに、慣れているほうの発音でその漢字を読んでしまったことが起源らしいです。つまりは、歴史的推移で、言葉が発音しやすい形に推移していったということでしょう。

雰囲気(ふいんき)と読んで通じてしまうことと同じことなのではないのかな、と思います。

ふいんき(←なぜか変換できない)

だけど、いつか「ふいんき」という言葉が雰囲気と変換できてしまう時代がきてもおかしくないかもしれません。意味ではなく音を優先するようになるときは来てしまったときには。

昔からの言葉がどんどん姿を変えていくことは、人間が年をとって姿を変えていくことと同じくらいに当然のことです。現代に生きる自分達の考え方は、江戸時代に生きていた人々とは根本的に異なるだろうし、だとしたら、言葉だって変わってしまってもなんら不思議はないと思います。ただでさえ、カタカナ語なんていうどこの国の言葉だかわからないようなものが現代日本にはあるわけですから。日本語の定義自体が良く分からなくなっているのが、現代なのです。

ただ、一つ不安に思うことがあるとすれば、言葉のどの読み方が正しくてどの読み方が間違っているのかの判断がしにくくなっているのではないかな、ということです。元々の言葉が変質してしまったとしても、その元の言葉が現代において必ずしも正しいとは思えないからです。「ら」抜き言葉なんてその典型ですよ。

そういった意味では、小学校や中学校の国語の先生なんかは、言葉を教えるのも大変なんだろうなと思います。何しろ、教師が教える言葉は必ず正しくなければならぬ、という前提があるわけですからね。